

新約聖書は全体で 480 頁ですが(新共同訳聖書)、その内訳はパウロたちが書いた手紙が 45% (黙示録を含む)、44% が福音書、残りが使徒言行録です。使徒たちが信徒や教会に発信した「手紙」という宣教方法がいかに有効に用いられたかが分かります。

さて仏教の場合を見てみましょう。有名な蓮如(れんにょ 1415-1499) は、室町時代の浄土真宗の僧で、親鸞から始まる浄土真宗の第 8 代門首です。彼が門徒に与えた手紙による法話 221 通が現存するそうですが、その内 80 通が 5 帖に纏められて残されています。この時代は戦国の世で、交通事情もままならない時代ですから、手紙という手段が布教に用いられたのでしょう。この時代の識字率は正確には分かりませんが、文盲率はかなり高かったでしょう。これは「お経」となって読経され、伝えられていきました。蓮如ほど多くの手紙を書いた人は珍しいのです。

初代キリスト教時代のローマ帝国は「パックス・ロマナ」(ローマの平和)の下、軍用道路を使って、使徒たちの手紙は誰もが読める公用語のギリシャ語で書かれ、各地に届けられ、教会でたくさんのコピー(写本)が作られ、礼拝で朗読されました。これら 7000 以上の写本群が校訂され、今のギリシャ語新約聖書が編集されました。

蓮如の手紙は「御文」と呼ばれ、大切に保存はされましたが、コピーが作られることは新約聖書に比べれば微々たるものです。現代では講談社学術文庫などで読むことができますが、聖書のような毎年のベストセラーではありません。さてその中に、皆様も聞いたことがあるでしょう「白骨の御文章」は有名ですね。「されば、朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。…さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙と為し果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。あわれというも中々おろかなり。…されば、誰の人も、はやく後生の一大事を心に掛けて、阿弥陀仏を深くたのみまいらせて、念仏申すべきものなり」。

この意味は「今日・明日の事しか考えない人々よ、人の生涯ははかないもの。幻のようなもの。今は元気でも、次の瞬間には死んでしまうかもしれない。死は年齢を問わない。だから、その日暮らしの生き方をやめ、これからの生き方を考えよ。それには阿弥陀仏に深く帰依し、熱心に念仏を唱えることを勧める」というもので、人間の罪とか、私たちを救う方は誰か、なぜこの方が救える力があるのか、などという客観的論述ではありません。